

鈴木 匡子●著

山鳥 重, 彦坂 興秀, 河村 満, 田邊 敬貴●シリーズ編集

『神経心理学コレクション』 『視覚性認知の神経心理学』

書評者

高橋 伸佳 (千葉県立保健医療大学教授/リハビリテーション学)



神経心理学の対象は言語, 行為, 認知にはじまり, 記憶, 注意, 遂行機能, 情動などを含む広範な領域に及ぶ。このうち失認症を中核とする認知の障害は, 他の症状, 例えば失語症や失行症などと比べてとっつきにくいと感じる人が多いのではなかろうか。大脳の機能を大きく運動(出力)と感覚(入力)に分けたとき, 後者の障害である失認症は外から見てその存在がわかりづらい。障害を検出する際にも, 結果を出力という目に見える(表に現れる)形でとらえにくい客観的評価が難しい。こうした印象が失認症への積極的アプローチをためらう理由の1つかもしれない。

認知の障害は視覚, 聴覚, 触覚など感覚別に分類される。本書はこのうち最も重要な視覚性認知に焦点を当てたものである。本書の特長は2つある。1つは視覚に関係する高次脳機能のすべてを網羅している点である。内容は「視覚性失認」はもちろん, 「視空間認知」, 「視覚性注意」, 「視覚認知の陽性症状」から「視覚認知と意識」にまで

及ぶ。読み, 計算, 言語理解, 行為などについて, 視覚(あるいは視空間)認知の観点からみた項目もある。読者は全体を眺めてもよいし, まず興味のある部分から覗いてみてもよい。徐々にこの領域が身近に感じられるようになるだろう。

本書のもう1つの特長は, 著者の経験した38例もの豊富な症例が記載されている点である。しかも, 具体的に詳細に書かれている。多くの症例には病巣を示す実際の画像もある。読者は症例を読み進むにつれて, どんなときに視覚性認知障害の存在を疑うのか, それを明らかにするために行うべき検査は何か, 結果をどう解釈するか, 病巣も考慮して病態をどうとらえるか, など症状を解きほぐす術を学ぶことができる。例えば「水滴のついたトマトなんて」と題された症例(各症例にはこのような機知に富んだタイトルがつけられている)がある。脳出血後「料理の写真を見てもすぐにわからない」という症状が出現した。まず, 視力や視野の異常によらないことが確認され

る。「高次視覚検査」では一部に障害がみられたがこれでは症状を説明できない。次いで物品や風景の写真を用いて検査すると「対象の質的特徴の抽出」に問題があるらしいことがわかる。そこでさらに texture (肌理) の違いによる形の抽出能力を調べ, ついにこの症例では「texture の違いによって輪郭をとらえる機能」が低下していることを突き止める。「なるほどこう考えていくのか」と感心する読者も多いに違いない。

本書は神経心理学を学びつつある諸氏が視覚性認知に関する知識を整理し, 理解を深めるのに最適と思われる。さらにこの方面の研究に興味をもつ人にとっては, 症候の正確なとらえ方や病態解明へのアプローチの仕方について多くの示唆を与えてくれるものと確信する。

A5 頁184 2010年 医学書院刊
定価2,940円(本体2,800円+税5%)
[ISBN978-4-260-00829-7]